

特集 「モニュメント」に寄せて

モニュメント(monument)は多くの場合、記念碑と訳される。語源であるラテン語の monumentum は、「思い起す」、「回想する」という意味の動詞 moneo に由来するという^①。

モニュメントは直接的には、彫像に代表されるような個人ないしは個人の事蹟を記念する建造物はじめ人間集団の事蹟にかかわるものを示し、時に口碑と称されることのある、この意味での形の無いものを示すこともある。

大規模な城郭や宮殿・寺院、あるいは遺跡や影響の大きかった文芸作品なども時にモニュメントあるいはモニュメント的と称される。

換言すれば、ある時間やある空間を代表するような事蹟がモニュメントとして認識され、それである故に、時間を経て、空間を超えて伝えられる事蹟をモニュメントとして認識することになるであろう。ここにおける時間や空間は無機的なそれではなく、時期や時代として、あるいは場所ないし地域や国として認識されるものである^②。

多様な対象を有し、同時代の時間や空間のみならず、後の時間や異なった空間においても様々な意義を有した「モニュメント」が、二〇〇七年史学研究会例会の共通テーマとして選ばれた。様々な時間と空間を研究対象とする史学研究会の人文学諸分野にとって、格好のテーマの一つであろう。

人文学は本来、時空を超えた視野を有するものであり、人間・文明・文化の研究に携わり、それを生み出した時間と空間の研究に携わるのである^{③④}。

文字通りの記念碑が対象に選ばれたのは、「ナポレオンの『記憶』試論——ルーアンにおける皇帝騎馬像をめぐる

——〔竹中幸史氏〕と「戦後日本の海外戦没者慰霊——一九五〇年代遺骨収集団の派遣経緯と『戦没日本人の碑』の建立——」〔浜井和史氏〕であり、「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイション——」〔中村武司氏〕もわかりである。「ナポレオンの『記憶』試論」においては、ルーアンというフランスの一地域の社会的・経済的背景とナポレオン伝説の形成、記憶、記憶の再生産の過程が追跡される。

相前後する時期、ドーバー対岸のロンドンのセント・ポール大聖堂で行なわれた国葬について、「ネルソンの国葬」が、イギリスの国家による陸海軍の勝利や英雄のモニュメント建立の事業が行われたプロセスと意義を分析している。

「戦後日本の海外戦没者慰霊」は、戦後における海外戦没者慰霊碑の建立の事例を外務省記録から探り、その日本外交の状況に迫ろうとするものである。

これらの文字通りのモニュメントに対し、「はじまりの記憶——銘文と詩篇のなかの祖考たち——」〔松井嘉徳氏〕と「歴史的なモニュメントの碑刻銘文資料が語るもの——西暦一二——一五世紀アナトリアの場合——」〔井谷鋼造氏〕は銘文・碑文を取り上げる。「はじまりの記憶」は、家系・先王の事蹟を刻む金文が、時間を超えた記憶の再生産にかかわっていることを示し、「歴史的なモニュメントの碑刻銘文資料が語るもの」は、「遺跡を残した当時の人々とは、精神的・宗教的にほとんど全く何のつながりもない人々」にとつての意味を含めて再考しようとするものである。

一方、「国家形成のモニュメントとしての古墳」〔河野一隆氏〕は、古墳という巨大なモニュメントを営んだ文化全体を再考し、その文化の伝播を通じて、世界システムの一つとして再位置付けをはかろうとする。「平安期の御願寺と天皇——九・十世紀を中心に——」〔堀裕氏〕は、九・十世紀の「御願寺」とは何かを再考し、十・十一世紀の御願寺増加の意味を論じて、そこからみた「天皇の権威の変化」を考えようとするものである。

これらが、多様なモニュメントの意義を、モニュメント自体を通じて考えようとするのに対し、「シチュアシアニストとカウンターモニュメント——現代ツーリズムの萌芽か否か——」〔滝波章弘氏〕は、モニュメントを無視する試みの紹介

である。都市空間への新しい関わり方をめざす一九五〇年代のシチュアショニストがモニュメントを否定する意義の再認識を訴えるものである。都市空間におけるモニュメントの意義が逆照射されることになるう。

これらは『史林』でこそ可能な、多面的な議論であり、その醍醐味でもあろう。読者の御通読を期待したい。

① 二〇〇七年史学研究会例会、井谷鋼造報告（本号掲載）による。

文学部編『知のたのしみ 学よろこび』岩波書店、二〇〇三年。

② 『広辞苑』は、モニュメントを①記念碑、記念建造物 ②遺跡、遺物、③不朽の業績、著作、と説明している。

④ 金田章裕「大学改革と人文学の課題」、『IDE現代の高等教育』、二〇〇六年。

③ 金田章裕「文化の探求——時空を超えたまなざし——」、京都大学

二〇〇八年一月

史学研究会理事長

金 田 章 裕